

「破壊的」「10年は勉強」と  
酷評されたあの日から  
わずか2年で全国大会、  
そして翌年は日本一!



①俳句甲子園の地方大会初出場から3年目、初めて全国大会への切符を手に。そして翌年2015年の大会で日本一に! ②文化祭では、俳句甲子園の審査員と強豪校を招き、3つのテーマで試合を行い、2勝1敗で勝利。③さらに文化祭では、和本作りを行い古典の魅力をアピール。



④俳句の題材を求めて、名所・旧跡などにも出かける。⑤帰りの電車の中で句会を開くことも。「青春18きっぷ」を使って1日中普通電車を乗り降りし、ひたすら句会を続けるという練習を行ったこともある。

「待春や十指に包む親子丼」  
全国大会で劣勢を覆した一句

愛媛県松山市で毎年開かれる「俳句甲子園(\*)」。第18回大会で見事優勝を果たしたが、名古屋中学校・高校の文学部だ。俳句甲子園は5人1組のチームで参加し、事前に示されたテーマで作った句を披露しながら、相手チームの句を批評する。文学部が俳句甲子園に参加して4年目、並み居る強豪校のハートに迫る。

を退けての快挙だった。だが、全国大会に通用する作句力、鑑賞力を養うには、日々の勉強をこなしながらたくさん句を詠まなければいけない。知性と感性をハードな練習で鍛えながら、彼らはいかにして闘志を維持し続けたのか。俳句、そして文学に懸ける男子校生たちのハートに迫る。

古典研究、小説執筆、  
そして俳句作り。  
文学を全力で楽しむ!



⑥古書店で購入した本を調べ、論文を執筆する古書研究にも取り組む。印字、製本の状態などからどんな経緯をその本が経てきたのかを考える。⑦古書の取り扱い方も習得する。繊細な和紙が人の手の汗や脂で劣化しないよう、隅をそとつまんでページをめくる。

ハートを  
こがせ!

Vol.07

愛知県・私立名古屋中学校・高校  
文学部

何百もの句を詠んでは捨て、  
闘志と冷静さでつかんだ  
「俳句甲子園」優勝

ハートを  
こがせ!

Vol.07

愛知県・私立名古屋中学校・高校

文学部

## 17音の自由のために 高校生活を大切にし、 ひたすらに句を詠む

数百年の時を経た和本に触れ、  
今の自分を物語る小説を書く

名古屋中学校・高校の文学部の活動は、古典研究部門と近現代部門の2つが柱となっている。古典研究部門では、江戸時代に印刷・製本された和本を実際に手にして、内容を読み解き、古書の来歴を調べ、論文にまとめる。薄く、柔らかな和紙の手触りなど、教科書やインターネットでは味わえない本物に接することができる活動だ。

「和本で描かれている世界は、今とは全く違う世界ですから、内容を読み解く時も、僕らの常識が通用しないんです。変体仮名などの読めない字もたくさんありますから、誰が何のために、何を書いたのか、未知の世界を考察するのが楽しいです」  
(鈴木さん)

また、近現代部門では、生徒が小説を書き、さらに誌面の組版から表紙の装丁までも自分たちの

手で行い、文学部部誌である『文学帳』としてまとめる。スケジュールと格闘しながらも、ものづくりの感動を味わえる活動である。

「小説を書くのは大変ですし、みんなが期限内に完成させられるわけではないので、本作りは苦勞ばかりです。でも、本が完成するとやっぱりうれしい。つらいことがたくさんあるほど、その分、喜びも大きいことが分かりました」(宮地さん)

高校生活を豊かにすることが  
良句との出会いにつながる

古典研究と近現代のいずれかの部門に所属しながら、全ての生徒が取り組むのが俳句作りだ。4年前、初めて俳句甲子園の地方大会に出場した時は、俳句の決まり事もよく分かっていたいままでの挑戦で、審査員に「君たちの俳句は破壊的だ」「全国大会に出場できるレベルになるまで、10年はかかるだろう」と酷評された。しかし、生徒たちが

教師の思い

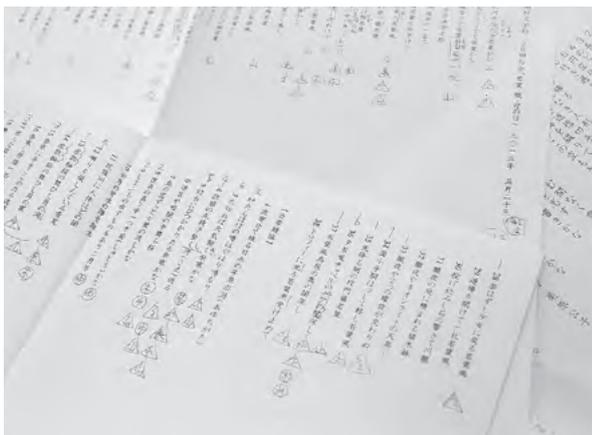
個性を輝かせる中で、  
責任感や他者性を  
育んでほしい



愛知県・私立名古屋中学校・高校  
水野大雅  
みずの・たいが  
教職歴18年。同校に赴任して16年目。  
文学部顧問。国語科。

「勝てるチーム」をつくるのが  
大切なのではない

俳句甲子園全国大会準優勝の強豪校がいる愛知県で、俳句作りに取り組んでわずか3年、しかも古典研究や小説執筆も行いながら、全国制覇を果たしたのはまさに奇跡です。だからこそ、今の生徒たちも「今年も全国へ」というプレッシャーを感じています。しかし私は、勝つことだけを優先しなくありません。これからも二足のわらじを履いてもらいたいし、俳句甲子園のチーム分けも単なる上手、下手ではなく、それまでの作句量、つまり、努力の跡で決めたというのが今の私の考えです。俳句は、何百と詠むことで少しずつ上達するものがあることは生徒も分かっていますし、そうした努力をしてきた人ならば、みんな納得



日曜の夜までに作った俳句を、水野先生にメールで送る。先生が、誰が作った俳句かわからないように一覽にしたものを使って、みんなで一句ずつ批評していく。たくさんの句を作ることは、自分の作句力を高めるだけでなく、仲間の鑑賞力を向上させることにも通じる。

俳句作りをやめることはなく、結果、その2年後には、地元の強豪校を破って全国大会に初出場し、翌年には全国大会優勝の栄誉をつかんだのだ。

今の部員たちは、古典研究と俳句、近現代と俳句と二足のわらじを履きながら、全国大会優勝校としてのプレッシャーと戦い、3年連続の俳句甲子園全国大会出場をねらう。

「俳句の強豪校には、俳句とほかの活動を両立している生徒が意外と多いんです。俳句は自分の世界観を表現するものですから、高校生活でいろいろなことを体験しないと高校生らしい俳句は作れません。古典研究や小説執筆での経験が俳句作りで役立つことはきつと思えます」(北口さん)

「自分たちも先輩たちのように全国大会に出場でき

きるのか、本当はとても不安です。でも、僕はその不安はなくすることが出来るものではないと思っています。できることは、とにかくたくさん俳句を作って、自分に自信をつけることです」(宮地さん)

高校生活を満喫し、1000句、2000句と詠むことで、駄句から良句が見えてくる……日本一をつかんだ先輩たちのように。

待春や十指に包む親子井  
流星を待つや宇宙は成長す

さらはれるために亀の子波を待つ

※いずれも「待」の一字を詠み込んだ2015年度俳句甲子園決勝での同校の句

言葉と自分を磨き抜いた先にあるのは、わずか17音の「魂の自由」だ。

### 鈴木慎之介

すずき・しんのすけ

2年生。部長(古典研究部門担当)。

### 宮地雄也

みやじ・ゆうや

2年生。部長(近現代部門・俳句部副担当)。

### 北口直敬

きたぐち・なおたか

1年生。近現代部門に所属。部誌『文學帳』編集長。

して認めることができるでしょう。

どの生徒も個性的で、熱中すると周りが見えなくなり、時には自分の意見を押しつけようとして、衝突することもありますが、しかし、それでも仲間と同じ目標に向かっていくうちに、「このままの自分ではいけない」と理解し、少しずつ変わっていくのです。俳句甲子園への投句でも、「この句でいいのか」と議論が続きます。「このままでは、自分はこの句を守れない!」と感情をあらわにする生徒もいます。時間の許す限り、より良い句を求めて議論すればよいのです。しかし、それでも最後は決断し、「みんなの句」として守らなければいけません。

生徒たちは文学部の活動で、「個性的な仲間が集まるから面白い!」と実感しながら、責任感や他者性を育んでいるのです。

### 愛知県・私立名古屋中学校・高校

◎「敬神愛人」を建学の精神とし、キリスト教精神に基づく人間教育を行い、社会に貢献できる指導者たる紳士の育成に取り組む。文武両道を標榜し、厳しい学習指導を実践する中で、部活動にも積極的に参加できる体制を築く。

◎設立 1887(明治20)年

◎形態 全日制/普通科/男子

◎生徒数 1学年約470人(高校)

◎2015年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、北海道大、東北大、東京大、信州大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大などに142人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大などに延べ1278人が合格。

◎URL <https://www.meigaku.ac.jp/>